

萩ネコ寺での出会いと研究に流れる時間をもたらすもの

山口 睦（山口大学人文学部）

山口大学人文学部に赴任して 2026 年で 10 年目になる。文化人類学を専攻として大学院に進学し、研究を生業とする道のりは四半世紀余りとなった。私は、近現代日本社会における贈与交換というテーマに取り組む中で、様々な資料を用いて近代化という大きな時間の流れの中で贈与行為がどのように変容するか考えてきた。香典帳や祝儀帳といった文書も使うため、事例を編年体で位置づけることは自然であったが、昨年度のある出会いを通して自己の中の時間の経過がもたらすものを感じる体験をした。

私が所属する社会学コース民俗学・文化人類学分野では、毎年 3 年生の調査実習として山口県内の市町に出かけて学生が各自のテーマについて調査を行う。2025 年度は萩市であった。その中でネコ寺として有名な雲林寺を調査対象に選んだ学生がいた。ご存じの方も多かろうと思うが、雲林寺は萩市むつみ地区にある臨済宗南禅寺派の寺院である。萩藩開祖の毛利輝元とその夫人などの墓がある天樹院の末寺であるが、1996 年に就任された現住職の角田慈成さんが 2008 年頃からネコ寺としての活動を始めた。知人の形見分けとして寄贈された招き猫のコレクションを飾ったことから始まり、今では多様な猫の置き物が境内や寺院内に所狭しと飾られ（写真 1）、猫にまつわる授与品の開発、猫供養祭や生き物の健康祈願祭の開催などの活動をされている。複数のテレビ番組や写真集などに紹介され猫好きが集まるスポットとなっている。



写真 1. ずらりと並ぶ木彫りのネコ（筆者撮影 2026 年 5 月 9 日）

調査実習では、6月予備調査、9月本調査、11月補足調査があり、角田慈成さんと妻の覚子さんにはお話を聞かせていただき学生が大変お世話になった。私も学生を雲林寺に送り迎えするなかでお二人に挨拶する機会を得た。私が香典帳などを資料に研究していると説明すると、角田さんはある資料を見せてくださった。2011年5月に京都の建仁僧堂で行われた竹田益州23回忌、湊素堂の法要の把放帳（香典帳）の写しである。帳面のタイトルは「金剛老漢二十三回忌並ニ素堂老漢毎歳忌齋會記録並把放帳」である。角田さんの説明によれば、萩市の大照院住職であった故清水宗杲和尚から資料として賜ったものだそうだ。

内容は法要について運営や招待状、参加者、準備のスケジュール、役割分担、献立、購入品、祭壇の飾りつけ、香典、収支など非常に詳細に記録されている。私がこれまで目を通してきた村長や村役人、豪農などのどの香典帳よりもはるかに詳しかった。

香典帳を利用した研究は、民俗学や日本を対象とした文化人類学、社会史を中心とした日本史、農村社会学などで行われてきた。歴史学においては大名や武家など支配階級の贈答記録を使った研究もあるが、それ以外の分野においては特に被支配者層である村落部に保管されている贈答記録が利用されてきた。特に近世期の村落部における古文書の多さについて日本は世界で有数の量を誇り、大量の文書が蔵を持つ家―村長や村役人、豪農や豪商など―に保存されている。

そのような流れの中で、香典帳を利用した私の研究は、大きく分けて山形県南陽市のある農家の事例と、山口県文書館所蔵の県内各地の10家分の事例分析のふたつがある。これまで扱った事例は、近世期の村の村長や村役人、武士、医者、近代の戸長、村会議員、郡会議員、市長などを務めた家柄の記録である。先行研究において、寺社が保存する文書がこれら村落部のものと比べて年代的に古いということは指摘されていたが、これまで神社や寺院の文書を目にする機会はなかった。先行研究で取り上げられる限りにおいて全国各地の村落部の香典帳は、細部の差異はあれども形式において似通っていて、基本的な内容は参列者氏名と香典の内容が主である。

しかし、考えてみれば、葬式を取り仕切る寺院の香典帳が村落部の香典帳の手本になっていてもなんの不思議もない。見せていただいた資料は現代のものではあるが、今後寺院の香典帳を検討する必要性を感じた。

以上のような思わぬ出会いを私たちの業界では「犬棒調査」と呼ぶ。調査の目的や対象などが不明瞭な状態でも、うろうろ歩いていると何か面白いものに出会うという現象が起きたのだ。

さらに、驚くことが続く。

私が香典帳を研究し始めた大学院時代、同じ研究室の日本史の先輩方にご指導いただき、先行研究としても日本史の村落部における文書についての文献を参考にした。その中で、贈答記録は、村の行政や経済といった公的な事柄を記した公的文書とは異なり、各家の私的な事柄に関する私的文書と分類されることを知った。生活史などを

除けば各家の交際の記録である贈答記録は資料としてあまり利用されていない状況だった。山形県南陽市の A 家においても、すでに南陽市史に文書を提供しており、市史編纂関係者が村の行政や経済に関わる文書について目録を作っていた。私が分析した 302 点の贈答記録はあらかじめ除かれており、私もその分類を受入れ、私は「私的文書」としての香典帳を資料とすると認識していた。

ところが、雲林寺で見せていただいた把放帳は、事細かく記録され、これまでみた贈答記録の枠を超えているように感じられた。角田さんに「なぜこのように細かく記録するのか」「どういった意味を持つ記録なのか」ということを尋ねていると、「私的なものであるからこそ、いつ公的な事柄となり、記録を提出する必要がでてくるかわからないからではないか」とご指摘された。これを聞いて目から鱗が落ちた。

私は、現代の学術の枠組みを通して、何の疑問も持たずに過去の資料をあらかじめ分類して認識していた。しかし、公的／私的、という枠組みを当時の人々も持っていたわけではない。無論、「オーヤケ／ワタクシ」といった概念はあったと考えられるが、その意味するところは現代とは異なるだろう。そして、私が思っているよりこのふたつの領域は分かたれていないかもしれない。

自分が学究の徒となり始めたころ、自明とされていた先行研究の枠組みをとりあえず受入れ、研究に取り組んでいた。当時の自分に批判的姿勢が足りなかったといえるかもしれない。しかし、長い時間がたち経験を積む中で、今回自分の研究の土台を構成している研究上のものの見方が 180 度変わるかもしれない出来事が起こることの面白さを味わった。

ただ新しい資料に出会い、自分の研究が進展し広がるだけでなく、研究上の枠組みや見方の変化が起きることがあり、「長く続けているとこんなことが起きるのか」というその現象に、自分が研究に向かい合ってきた歳月を感じた。

振り返れば自分の研究はいつも話をしてくださる人との出会い、資料を見せてくださる人との出会いによって進んできたと感じる。今後も研究を継続する先に、新たな出会いによって自己が変容する面白い未来を期待したい。